「零丁借宿」
平　忠度

行きくれて木の下かげを宿とせば
花や今宵の主なるらむ

「吟詠怨風」
源　義家

吹く風を匂来の関と思えども
道もせに散る山桜かな

「滋賀浦荒」
よみ人知らず

さゞなみや滋賀の都は荒れにしを
昔ながらの山ざくら花

「奈良都古」
伊勢大輔

いにしえの奈良の都の八重桜
今日九重に匂いぬるかな